

「六道御前」一人芝居につぐ第2作!

石牟礼道子作

草文

—西南役伝説より—



「西南役伝説」について

解説 赤坂 憲雄

聞き手 笠井 賢一

出演 石橋 敬子

八田部 鉄

吹き物 設楽 瞬山

構成・演出 笠井 賢一

2025年5月25日(日) 15時開演
入場料..4000円 鎌仙会能楽研修所



解説 「西南役伝説」について

序章

『深川』

わしども、西郷戦争ちゆうぞ。十年戦争ともな。一の谷の熊谷さんと敦盛さんの戦は昔話に聞いとったが、実地に見たのは西郷戦争が初めてじゃったげな。それからちゆうもん、ひつつけひつつけ戦があつて、日清・日露・満州事変から、こんだの戦争―。西郷戦争は思えば世のなかのひらくる始めになつたなあ。

聞き手 赤坂 憲雄
笠井 賢一

出演 八田部 鉄

吹き物 設楽 瞬山
構成・演出 笠井 賢一

拾遺ニ 『草文』

おなごのな、色じんけい殿のおりよらしたばい。「兄しやま！」ちゆうて呼びかけてな、「おえんしやまなあ、びつくりした」ちいえは、しをしをしてなあ、後向いて往つてしまひよりました。

あんまり小愛らしか声じゃけん、いっぺん呼ばれたものは、その声の耳にひつついて忘れきれんち云いよつたばえ。

「おえんしやま、その袋ん中にや、なんば入れておんなはるな」そう聞けばにっこり笑うて、後ろに隠してな、「櫛と―、紅と―、文と―」
文ちゆうのはな藁すぼ。その藁をばな、ただ結んであるのがはいつておりよりました。
なんの意味じゃつたよな、あの文は。

出演 石橋 敬子

吹き物 設楽 瞬山
構成・演出 笠井 賢一



『草文』という道標

おえんしやまという童女のままの狂女が、藁を結んで指で輪を作つた程のこーまんか輪さを結んで、方々に残しおいていった草文。山行きさんたちの通りかかつて、「あら、おえんしやまの通らしたばいな」ちゆうて、山鉾の先でつつかけてみて、「ほう、可愛らしか、草の文結んでこぼしてあるよ」誰に遣んなさる草文じやろうか「真実なあ、落ん子取りに行くときの道の標ぞ」

石牟礼文学は私たちに残しおいてくれた『草文』であり、形見である。渡辺京二

石牟礼さんのふたつの小説、島原の乱を描いた『春の城』と水俣病を描いた『苦海浄土』とが、『西南役伝説』を仲立ちとして結ばれている、そんな見取り図が生まれている。われわれの近代とは何であったのか。痛苦にまみれ、それでも夢を紡ぎながら、そこに異相の近代が起ちあがる。水俣と福島とは、やはり石牟礼道子さんによって繋がれていたのかもしれない、と祈るように思う。

民俗学者 赤坂憲雄

石牟礼道子 1927年 熊本県天草郡生まれ。詩人・作家。『苦界浄土』わが水俣病は文明の病としての水俣病を鎮魂の文学として完成させた。マグサイサイ賞、紫式部文学賞朝日賞、芸術選奨文科学大臣賞受賞。著書には「かみの国 石牟礼道子全詩集」「石牟礼道子全集」「不知火」を藤原書店より刊行。作家としてのすべてが凝縮された新作能「不知火」は東京、熊本、2004年には水俣で奉納上演された。多田富雄は新作能の類型を破る画期的な作品と評価した。現代の病巣を癒す力と、深い祈りと歌に溢れた作品群は日本文学の枠を超えた重要な文学として、ますます示唆に富んでいる。

2025年 5月25日(日)
15時開演(45分前開場)

於 鑛仙会能楽研修所

東京都港区南青山4-21-29 TEL 03-3401-2285

〈交通〉地下鉄「表参道駅」A4出口より徒歩3分

入場料 4000円(全自由席)

お問合せ・お申込は アトリエ花習

TEL 090-9676-3798

mail@atelierkashu.com

ホームページより申込フォームへ

